

一人ひとりを大切にできるボランティア活動のために

① 一人ひとりのニーズの違いに気づくことから始まる

被災者には、一人暮らしの女性や高齢者、ひとり親世帯、障がいと共に生きる人、幼い子や介護が必要な高齢者がいる家族、外国人など様々な背景を持つ人がいます。その人の性のあり方、年齢、家族構成、被災の度合いによってもニーズは違います。

事例（九州と過去の大規模災害より）：アレルギー対応のミルクや食品が無く子どもに食べさせてあげられない、子どもが夜泣きをするので避難所を出て車で生活をせざるを得ない、介護用オムツや呑み込みがうまくできない高齢者・障害者用の食事が無い、エコノミークラス症候群で命を落とす人が出ている（トイレの整備が重要。男女別にする、足腰の悪い人でも使えるようにする）、発達障害を持った子どもの一時預け先が無いなど。

- ✓ 被災者のおかれた状況に応じた対応を心がけ、幅広く被災者の声を聞く工夫をしましょう。
- ✓ 活動の中では女性の意見を積極的に聞くようにしましょう。女性は生活上のことや健康の問題などは言い出しにくいものです。特に、子育てや介護上の困難を多く抱えているかもしれないかもしれません。支援物資の配布などの際にも気を配りましょう。
- ✓ 生活再建や復興のスピードや段階は、一人ひとり違うことを意識しておきましょう。また、避難生活が長期化し、心身の面で不安定な方がいらっしゃることも考えられます。
- ✓ その場での十分な聞きとりや対応・改善が難しい場合や、トラブルになりかねないような場合は、絶対に無理をせずに、所属団体に持ち帰って相談しましょう。

② 安全・安心な空間を確保しましょう

被災者とボランティアの両方が、二次被害を受けることがないように工夫をすることが大切です。

事例（東日本大震災より）：仙台市若林区の避難所で、防犯面を心配する声を聞いた。若林区の主婦（50）は「体育館への夜の出入りが、基本的に自由になっている。住民の顔が分かる人が入り口にいないと不安だ」と語った。屋外にある仮設トイレは、体育館裏の人目が届きにくい場所にあった。日中でも女性が1人で使うのは怖いのではないだろうか。（河北新報 2011年4月13日）

- ✓ 過去の大災害事例でも、女性や子どもの性被害がおきたことが報告されています。安全な空間を確保できるよう、手助けをしましょう。
- ✓ 特に建物内外の死角となる場所や避難所内のトイレ周辺は気を配り、一人にいる子どもには注意を払いましょう。
- ✓ 支援活動は、明るい時間帯に複数で行動し、車への同乗は慎重にしましょう。
- ✓ あなた自身が安全面について不安を感じたり、被災者が安全面で不安を持っているようであれば、所属団体の責任者に知らせましょう。

③ ボランティア・リーダーや安全担当者は、できるだけ男女両方が担いましょう

①と②に対応するためにも、男女両方がボランティア・リーダー等を担うようにしましょう。誰でもどのような立場でも、どのような気づきや悩みでも、相談・対応しやすくします。